各地の取り組み　神奈川県小田原市

# 子育て支援センターと各機関の連携が子育て世帯を見守る町　小田原

子育て支援センター「マロニエ」センター長　本間　一江

神奈川県西部に位置し、目の前には雄大な相模湾、周囲には箱根連山を望み、都心に比べ夏は涼しく、冬は暖かい町。都心へのアクセスも良く東京・横浜への通勤・通学圏です。ほどよく都会でほどよく田舎、人も時もゆったりしている小田原は、子育て世帯にとっては住みやすい町の１つかもしれません。

## 市内に４つの子育て支援センター

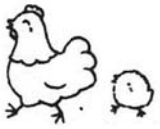
現在市内には４つの子育て支援センターがあります。市より委託を受け、センター型の「マロニエ」を小田原短期大学（以下小田短）が、ひろば型の「おだぴよ」・「いずみ」・「こゆるぎ」をぎんが邑（NPO 法人ぎんがむら小田原支部）がそれぞれ運営しています。

受託後丸４年、毎月センター長会議を行い、相談しながら子育て支援センターを盛り上げ運営してきました。４つのセンターは、特徴や良さを生かしながら活動を展開しています。

＜マロニエ＞

市内の中心的な商業施設が広がる地域にあり、木を多く使った広い部屋でのびのびと遊んだり、ゆっくり過ごせます。年々他市からの利用者も増え、昨年度の１日の平均利用者数は約 140人と本当に多くの親子が遊びに来ています。最近では０歳～２歳の親子の利用が中心となっていて、安心・安全に過ごしていただく為に、朝の掃除・環境整備と開所時の見守りには特に配慮をしています。

大きな特徴としては、小田短の教員や学生が来所し一緒に活動をしていることがあります。「栄養相談」「心理相談」は、毎月短大の管理栄養士と臨床心理士が来所し、乳幼児の食生活全般について、母親の不安定な心のケア、育てにくさのある子どもへの関わり方など、継続して母親をサポートします。また隔月で「食育講座」「保育講座」を教員と学生が実施し、利用親子に好評です。他毎月、小児科医相談日、助産師を囲んで「お産おしゃべりデー」、生後６か月までの「赤ちゃんデー」、11か月までの　「ヨチヨチデー」市民ボランティアさんと盛り上げる「誕生会」「音楽コンサート」などを実施しています。



＜おだぴよ＞

小田原駅西口から徒歩３分、商店街の中にあります。駅前なのでセンターに駐車場はありませんが、徒歩や自転車、電車で遊びに来てくれます。０歳～１歳の親子の利用が中心で、育児休暇中のんで「パパと遊ぼう子育てわくわくライブ」「パパの料理教室」等を開催し好評です。

また商店街の夏祭りなどに参加したり、近くの医療系大学の教員による子育て相談も毎月実施され地域に密着した子育て支援に取り組んでいます。

＜いずみ＞

城北タウンセンターいずみの３階にあります。４つのセンターの中で唯一土曜日も開所している為、家族や父親の利用が多いのが特徴の１つです。お弁当持参でゆっくり過ごす場合は、ランチタイムを設けてはいませんが、お子さんの様子に合わせ館内の別室で食事ができます。

毎月おだわら子ども防災のスタッフによる「防災講座」では、防災は日常の生活にある物を使いこなしてこそ非日常に役立つ、という視点から情報交換や学び合いを進めています。

また保育士・幼稚園の先生が講師となり一緒に遊んだり、工作をする「パンダくらぶ」も人気のあるイベントです。

＜こゆるぎ＞

市の一番東、橘タウンセンターこゆるぎの３階にあり、大きな窓から入る太陽光とそこから見える相模湾は絶景です。隣接する二宮町・大井町からの利用者も多く、市内と市外の利用者同士が知り合いママ友となり、それぞれの市町の子育て情報を交換しながら子育ての輪が広がる様子は、スタッフにとっても嬉しいことです。

他の３つのセンターと異なり週３日の開所と立地の面からも、全体的に利用者は少なめです。その特徴を生かし、講座やイベントも工夫して行っています。また多くの場面で地域のボランティアさんが積極的に参加していること、主任児童員が開催している子育てひろばと連携する中で、センターが地域との交流の場の１つとなっています。

## マロニエに勤務するきっかけ

平成23年に小田短がマロニエの運営を市より受託し、勤務するスタッフを探していました。当時私は縁あって小田短の児童文化部の指導をしていました。顧問の先生からの声かけでマロニエのスタッフに。現在はセンター長として、週３日マロニエに勤務し相談業務、ひろばの講座・イベントの企画、他の機関との連絡調整、各センターの講座イベント、幼稚園と保育園の園庭開放日を掲載した「月刊子育てカレンダー」の作成、「幼稚園・保育園情報シート」「子育てサークル一覧表」の

# 黒子に徹するということ

作成。市内で開催される講座等の講師活動。他市からの視察への対応。市内中学校の課題への協力など様々な役割をしています。また以前から週２日は、市立小学校のハートカウンセラーとして小学校へ勤務をし、児童・保護者・教職員に寄り添う仕事もしています。

## 時間かけてつないできた他の機関との連携

＜ファミリーサポートセンター＞

ファミサポ利用親子とセンター利用親子の情報交換、情報共有をしています。ファミサポ新規支援会員登録研修会へマロニエセンター長が講師として出向き、現代の母親の子育て状況等について伝えたり、逆にファミサポスタッフにセンターへ来てもらい、利用の説明と登録会を実施。今年度は、初の試みで新支援会員が依頼会員のお子さんを預かる練習の場としてセンターを提供するなど、連携の在り方をいろいろ模索しています。

＜健康づくり課＞

保健センターで実施する４か月児健診時にセンター長が出向き、支援センターの周知をし利用を促しています。今年度の新たな試みとして、保健師がセンターへ出向き、乳幼児の計測と育児相談会を春と秋に実施し、春は多くの親子の利用がありました。

＜水産海浜課＞

小田原の季節の地魚を使用し、地元の調理師専門学校やお魚普及の会の協力を得て、父母に向けた料理教室をいくつかのセンターで実施。最近の若い家族の食卓には魚料理が並ばないと聞き、ぜひ乳幼児の毎日の食事に魚料理を、との私たちの願いも込めた講座は今後も定期的に開催予定です。

＜農政課＞

「木育」促進の為、地域産木材を使用した簡単な木の玩具づくりをセンター内で実施。手になじみ、ぬくもりのある木の玩具は毎回多くの親子に喜ばれています。

＜その他＞

子育てに関係のある課との合同研修会の開催。昨年度は隣の二宮町との合同研修、情報交換の実施などをスタートしました。

## 子育て支援センターの事業という位置づけのＢＰ講座

市よりＢＰファシリテーター養成講座受講の提案があり、平成26年１月の養成講座へ各センターから１人ずつ参加しました。受講当日までは気楽な気持ちでいたのですが、受講後「これは大変なことになった」「連続４回の構造化されたプログラムをしっかりできるのか？」「母親同士の話し合いを上手く進行できるのか？」と不安が募ります。本部へ出す数々の書類、プロジェクターなど映像機器の取り扱い等、初めての事ばかりなので、４人で何度も打合せをしました。無事４人が資格を取得し、平成27年度の実施計画を立てる上で一番の検討事項は、参加者募集の周知方法でした。センター利用者の中だけで対象者を募ることは難しく、市内公共施設にチラシを配架しても対象者の手元に届くかわからない。この点を改善する方法として、まず以前から連携のある保健センターの４か月児健診でチラシを配布し参加を呼び掛けるようにし、また市の新生児訪問時に保健師さんにご協力いただき、チラシを渡して頂くことが可能になりました。チラシにも工夫を加えました。年間を通してＢＰ講座が開催されていることがわかるように、年間予定を掲載し対象者は実施するセンターだけでなく、どのセンターへも申し込みを可能にしました。また年間予定を決めたことで各センターの妊婦対象の講座でも出産予定に合わせてＢＰ講座の周知が可能となり、出産後もいろいろなサポートがある事をお話しできてよかったです。今年度すでに２回のＢＰが終了しましたが、参加者募集については、改善が見られました。

これまで小田原では６回ＢＰ講座を実施しました。初めは緊張して固い表情の母親たちが、回を重ねるごとに表情も和らぎ、子育てに対する意識の変化を感じられると嬉しいですし、講座終了後に誘い合ってセンターへ遊びに来てくれると安心します。また最終回に紹介した地域の子育てひろばに参加して少しずつ地域との関わりを持ち、子育ての輪を広げている親子もいる様子です。

## 今、子育て支援の現場で思う事

第１に、センターの中で出会う母親の中には、子どもを産んで母となっても子どもを愛せない親、子育てに大きな不安を抱いている親が少なからずいることを知りました。そのような母親も子どもの発達段階を知り、子育て方法を学ぶと自然に子どもへの愛情が湧く事もわかりました。ぜひ早い段階でＢＰ講座等に参加し、子育て仲間を作り、共に悩み喜び、互いの子どもの成長を楽しめる親になって欲しいと願います。

第２に、これまで進めてきた他機関との連携は、子育て支援の様々な可能性を広げるものですが、課題として出てくる事の１つに、自宅にこもりがちな親子に対して安心かつ必要な支援を届ける為にはどうしたらよいかという問題があります。何度話し合いを重ねてもなかなか有効な解決策は見当たらないのですが、既存の市の広報誌、回覧板、ＨＰ等での更なるきめ細かい周知、そして支援センターが地域の中で信頼を得て安定した支援の継続を可能とする為には、支援者の資質向上や地域とのつながりが求められているように思います。

ＢＰのファシリテーターは「黒子に徹する」と申しますが、これは通常の子育て支援の現場でも共通して言えることではないでしょうか。今後も子育て支援の在り方を探しながら、子育て世帯に寄り添い、共に歩む支援者でありたいと思います。